

第 11 号

川越初雁会



第七回定期総会九月三日に開催

日時 平成二十九年九月三日（日）午後三時開会
場所 氷川会館（川越市宮下町二一十一三）

審議事項 平成二十八年年度事業報告並びに決算報告

平成二十九年年度事業計画案並びに事業予算案

総会記念講演 「中東・なぜ紛争が絶えないのか？」

講師 鏡 武氏（高一四回） 元シリア大使

川越初雁会 春季講演会 三月一九日於同窓会会館

麻酔の進歩 講師 埼玉医大病院麻酔科 長坂 浩氏（高二五回）



講演中の長坂氏

埼玉医科大学の長坂です。一九八〇年に卒業しまして、臨床をしつつ基礎研究を行っており、二〇〇〇年から二〇一三年までは明海大学の歯学部在籍しておりました。その時にはたくさん本を執筆しておりました。私の名が知られるようになったのは、麻酔時に痛みの刺激が伝わる際の脊髄の細胞活動の研究

論文が、アメリカの専門誌に載ったのがきっかけでした。今ではその内容が、世界中の麻酔科医を目指す人が読むテキストである、ミラー著の「Anesthesia」という本に載っています。他にもいろいろと良い研究をしていると自分では思っているのですが、これが一番当たった論文でした。

麻酔の歴史

麻酔の本題に入ります。外科治療の発展は消毒法と麻酔の進歩による貢献が大きいと言われていま

す。麻酔がない時代の手術は①悲鳴が他の患者の耳まで届かない場所に手術室を設ける。②患者をしっかりと縛り付ける。③患者に外科医のステッキを噛ませる。④急いで手術を済ませる。⑤外科医の疲労に最大の配慮を払う等を留意して行われてい

ました。なんてことはない、これは拷問ですね。今ではとても考えられない話です。

鎮痛剤の歴史は、まず一八〇四年にドイツでモルヒネが開発されたことに始まります。鎮痛作用はあるが、意識はそのままで、気分的な不快は存在するというものです。

時を同じく一八〇四年に華岡青洲が「通仙散」による世界で最初の全身麻酔下での乳癌の手術に成功しました。

続いて一八四二年にアメリカでエーテル麻酔による抜歯成功、一八四四年に抜歯に笑気ガスを使用し無痛を実現、一八八五年にコカインの注射による局所麻酔と、麻酔の医学史が続いてお

ります。

これは一八七六年西南戦争で負傷した兵士の



西南戦争手術時の写真を解説

足を切断する手術の様子です。エーテルの次に開発されたクロロホルムを使っています。全身麻酔がかかっているのです、先ほど述べた拷問状態ではなく、画期的といえます。ただ戦場での手術ゆえ消毒は行っていません。今ではとんでもないことですが、当時の日本人は免疫的に強かったためであるうと思います。

現在でも発展途上国では、術後に抗生物質使用なしでも感染症が発生することは少ないようです。なぜ華岡青洲の全身

麻酔法が世界に広まらなかったという点、日本で伝わったということ、論文になっておらずいわゆる「秘伝」として伝わっていたことが大きいといえます。今では外国でも華岡青洲の名前は知れ渡っています。

麻酔の概要

麻酔には全身麻酔法と局所麻酔法があります。局所麻酔法は末梢神経系を麻痺させ、全身麻酔法は中枢神経系を麻痺させます。

全身麻酔は外見上寝ていますが、睡眠とは異なります。全身麻酔下では視床下部の電気活動も抑制され恒温動物が恒温動物になる状態となります。全身麻酔による意識喪失は通常の睡眠と異なり（REM睡眠がなくなり）、眠りが深くなったり浅くなったりということがない状態になります。全身

麻酔下でメスが入った時、痛みを認識しませんが血圧や心拍数の上昇などがおき、ストレスホルモン（コルチゾールやカテコールアミン）が分泌されま

す。

全身麻酔は①意識消失②鎮痛③筋弛緩④有害反射の抑制の四要素からなります。昔は四要素を満たすために、クロロホルムなど一種類の麻酔薬で行われていましたが、場合によっては術後、なかなか目を覚まさない事や、肝臓や腎臓を悪くするような、副作用がしばしば生じていました。

だからといって少なめに使用すると、術中に痛くて目が覚めたり、動いたりします。適度な麻酔は高度な技術が必要でした。

全身麻酔下の手術中は、麻酔の作用で、低下している呼吸、血圧、心拍、

体温等の生きている兆候（バイタルサイン）を麻酔医は常にチェックする必要があります。必要に応じて人工呼吸をしなければならぬのですが、人工呼吸ができないケースがあります。

麻酔の世界では有名な話なのですが、プロレスラーの力道山が亡くなったケースです。彼は体が大きく、首が短く太い、みるからに人工呼吸がしづらい体型です。夜の町で暴漢に刺されて緊急手術、全身麻酔をかけたら、人工呼吸ができなくて、亡くなりました。

昔は機材の未発達により、呼吸をしているのかわからず止まっているのかわからなかったりすることがよくありました。その結果、合併症を起こしたりする事故もあったようです。今はそういうことはありません。

今ではそういうことはありません。

最近の麻酔の事情

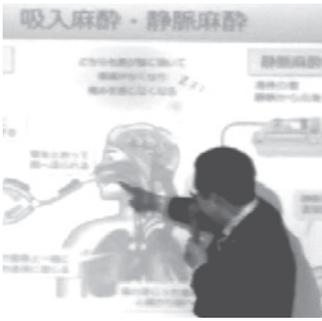
今では副作用の軽減のために四種類の薬剤を用いて、前述の四要素を満たすようになってきました。

例えば①意識の消失はデスフルラン（吸入式）という薬です。エーテルと同じような作用があり、覚めが早いのが特徴で、術後吸入を切ると五分後には目が覚めます。

②鎮痛はレミフェンタニル。これはモルヒネと同じような薬で、作用時間が短く、三分くらいで血中濃度が半減します。

③筋弛緩はロクロニウム。単純に筋肉だけを麻痺させる薬で、血圧や脈に影響を与えないという、すばらしい薬です。

私が若手のころまではクラレというすごい薬がありました。南米の原住民が狩で使用する吹き矢に使うものと同じなの



麻酔の種類について説明

ですが、ヒスタミンがでて脈が振れなくなる、麻酔医にとって恐怖の薬でした。

また安全性を高めるため、筋弛緩回復薬のシガマデクスもよく使われます。これを使用すると瞬く間に回復します。

④意識消失には整脈麻酔薬であるプロポフォールもよく使用されます。これはマイケルジャクソンが毎日打っていたことで有名です。また、最近東京女子医大で子供に使用し死亡、訴訟騒ぎになっています。(製薬会社は子供には使用不可といっている)。

この五つの薬は、昔に

比べたら副作用はほとんどありません。劇的に使いやすくなり、今の若い医師も一年もすれば安全に麻酔がかけられるようになり、昔の^さじ加減^じといったものがなくなってきました。力道山も今でしたら死ぬ事はなかったと思います。

これらの薬はたいへんすばらしいものですが、値段の方も高価です。

例えばレミフェンタニルやプロポフォールは一本四千元、シガマデクスは一万円くらいします。安全性は増しましたが、医療費の負担は大きくなつたと言えます。

今、埼玉医大に米国から留学生が来ています。彼曰く、レミフェンタニルは見たことがない、デスフルラン、ロクロニウム、シガマデクスは米国では使っていないとのこと

日本と違って米国では医療保険に加入している人が少ないので、このような高価な薬はなかなか使えないということはよく聞く話です。

薬剤の進歩だけではなく医療機器の進歩、特にモニターの進歩は安全な麻酔に大きく寄与しています。パルスオキシメータとカプノメータの登場で、麻酔および麻酔科学は一変し、劇的に安全性が高まりました。

パルスオキシメータは患者を傷つけることなく血中酸素を計測し、一定の数値以下になると警報が出る仕組みです。

また、カプノメータも同様に、呼吸中の二酸化炭素濃度がわかる仕組みで、患者の呼吸ができていないときには、同じように警報が出ます。

麻酔中にセンサーで常にバイタルをモニターし、

自動的に薬剤の投与のON/OFFを連続して行えるようになり、結果的に手術時の出血量を抑えることも可能になりました。

以前は全身麻酔から覚醒後痛いのは当然とする風潮がありました。手術後の鎮痛も重要視されるようになりました。

今では術後に痛いということは、人権侵害くらいに思っていた方がよい状況です。術後鎮痛は様々な利点があります。患者の術後生活の質の向上のみならず、肺塞栓などの呼吸器系合併症の低下、早期離床が可能となり、医療費の節約にもつながります。

終わりに

今後も、薬理学の進歩やテクノロジーの進歩の恩恵を受けて麻酔学も進歩するであろうと思われまます。しかし、麻酔と

いう医療行為は人間を対象にしたものであるので、人を診るといふ心は変わらなければなりません。

モニターの語源はモニターとのこと、一歩間違えれば大変なことになります。機械を百%当てにせず、実際に患者さんの様子を直接診ることが大切と考えてます。

講演後、参加した川高生と長坂先生との懇談会が行われ、生徒からの質問に快く答えていただきました。先生が医学部を目指したきっかけは、川高時代の友人が医学部志望と聞いて、自分も医学部に行こうかなと何気なく思ったのが始まりのことです。意外な動機に、生徒たちもびっくりしてました。この中から将来医師になる生徒がでるかもしれません。

剣道部の歴史

松村 定明
(高一十回)



大正 13 年 5 月の第二回誘掖会主催県下中学校剣道大会優勝の記念写真。最前列左から 2 人目が浅野誠一さん、3 人目が山崎豊さん、4 人目が北村博学さん。北村さんの後ろに誘掖会会長の渋沢栄一翁が写っている。埼玉学生誘掖会は明治 35 年に渋沢翁が発起人となり、学生を援助するために設立された。

剣道部は、創立間もない明治三十四（一九〇一）年に「撃剣部」の名称で発足。大正になると、生徒に剣道か柔道のどちらかを「必修科目」として練習させていて、関東地方の大会で数々の優勝を果たし、全国大会にも出場している。いわば「第一期黄金時代」といえる。この時代の中心選手とし

和の初めにかけての「第一期黄金時代」を支えた一人として剣道師範の間中鹿太郎先生がいる。戦後に学校から武道が「追放」されるまで師範を務めた。間中先生は本校の近くに明信館という剣道の道場をお持ちになっいて、この道場に通って剣道を始めたという川中、川高生徒は何人もいた。

昭和十六（一九四一）年十二月に『真珠湾攻撃』が行われ、太平洋戦争が始まっている。戦時色が強まる中、翌年には従来の学友会が解消され、「川越中報国団」に改組され、「剣道部」も「剣道班」となった。昭和二〇年終戦。その後、学校での武道（剣道・柔道・薙刀・弓道）は進駐軍の命令で禁止となった。武道が日本軍の「大和魂」の精神形成に影響したとの判断により、「軍国主義的な教育の片鱗は残さない」との通達で、剣道の防具は校庭で燃やされるなどしたという。

昭和三十二年、学制改革で川越高校となる。各部の復活・新設が相次ぐ中で剣道部の復活は、まだ認められなかった。終戦後、進駐軍から「追放」された武道。それでも一部の愛好者によって、消えることなく守られていた。川越の拠点となったのは戦

前、多くの剣士を育ててきた明信館だった。昭和二七年学校において「撓（しな）い）競技」を認める通達が文部省から出された。この年、明信館に通っていた水野仁さんや長谷川稔さんから四人が学校や同級生らに働き掛けて部活動を始めていた。この際、学校で防具二組を購入してもらっている。昭和三十年「撓（しな）い）競技部」改め「剣道部」としての活動が始まっている。この年「川高剣道部後援会」が正式に発足。このころは、まだ思うような結果は出なかったようだ。しかし、徐々に「上位進出」の兆しが見え始めていた。例えば三十四年の埼玉県春季学徒大会は準決勝に進出。同三十六年の全国大会予選では三位、秋の県新人戦で古屋毅登さんは個人優勝をしている。昭和三十七年四月、剣道

部の顧問に豊島正夫先生が就任する。当時、東京教育大学体育学部を卒業したばかりの剣道五段だった。そして、翌年から本当の「猛稽古」が始まった。先生は、昭和三十八年十一月十五日から二月二十二日まで「百日寒稽古」を敢行している。これが「第二期黄金時代」を築くきっかけとなった。稽古は始業前の午前七時十分から午前八時五十分まで行われた。もちろん日曜日も試験日も行われた。一、二年生部員二十二名、寒稽古全員無欠席を達成した。そして新学期、昭和三十九年埼玉県春季学徒大会兼国体予選において、決勝で川口高校と対戦し、三対二で「川高」として念願の初優勝を果たしている。

川越高等学校剣道部開校五十周年記念誌より抜粋
次回に続く

雁の記

川越駅東口の話

川越散策日記

荒牧 澄多記

(高二十七回)

「アトレ」がオープンしてから、五月で二十七年が過ぎました。

駅前交通広場も、何回かの改修が行われましたが、ここのデザインは、川越のイメージが満載です。ちょっと食傷気味なほど。

設計の受託者は復建エンジニアリングですが、デザイン設計は戸田芳樹風景計画です。アトレの設計者



新河岸川に架かる橋をイメージしたデッキ

である佐藤総合計画に修景計画を発注し、関係者が議論しながらデザインイメージを作り上げて行きました。なお、平成三年度の第六回公共の色彩賞を受賞しています。

デザインコンセプトは、川越に帰ってきた人にとつて、故郷に戻ってきたと思えるような、また、初めて川越を訪れた方には、川越らしさに出会えるような場と考えました。

この頃は、蔵造りの町並みの整備が徐々に進み出し、それと共に知名度が上がり、観光客が増え始めた時期です。

しかし、川越駅の周辺はというと、江戸時代は町外れで蔵の街からも遠く、なんら歴史的都市としての雰囲気を感じることができ



小峰氏による鍛鉄の造形

ませんでした。

そこで、現代の川越の顔となるこの場所に、川越の歴史や文化を取り込んだデザインを計画したのです。

まずは、デッキの上を町並みに、下を川に見立てました。

広場全体を取り囲んでいるのは、川越の自然を象徴する緑です。地下駐車場の入り口は、屋敷林をイメージした檜と紅葉の列植、四隅は埼玉県の木の樗と、我が母校のシンボル、楠です。

中央のデッキは、新河岸川に架かる橋というコン

セプトで、床は太鼓橋状に膨らみ、手すりは欄干に見立てて笠木を赤く塗りました。この端部には、親柱をイメージしたオブジェが置かれました。蔵造りの影盛りを模した鍛鉄と、川越祭りや縞柄の絵タイルで構成されています。

縞柄は、川越唐棧から持ってきました。地上部の歩道も縞模様です。デッキから下を覗いてみてください。但し身を乗り出しすぎないよう要注意。

織物は、かつての川越の主要産業です。その表徴として、唐棧の縞模様を模しました。

デッキの上に目を戻しましょう。手すりやベンチ、街路灯などに黒い鉄の造形があります。鍛鉄と言って、鉄を熱し槌で叩いて作り上げるアート作品です。作者は、小峰貴芳氏（アトリエ遊火山、ときがわ町在住）。世界中から招待される作家

です。鍛鉄の力強さが、蔵造りとよく合っています。よく見ると、亀屋や蔵造り資料館を見つけることができるかも知れませんよ。

手すりも、外周部と内側でデザインが異なります。外周部は町並みをテーマに、町家の格子と屋根をイメージした笠木で構成されています。影盛り状の小品もついていますよ。一方、内側の手すりは丸い笠木で川岸のフェンスをイメージしています。これらの手すりの足元のグレーのタイルは、屋根の一番上に葺かれる雁振瓦カシラガワラを模しています。

デッキを支える広い桁を隠す為、蔵造りの軒蛇腹を採用しました。

これ以外にも、蔵造りのデザインがそこかしこにありますので、探してみてもいいかが。

次回も、川越駅東口のデザインの続きを掲載することをとお許しください。

春季 散策会

足利学校と世良田東照宮



世良田東照宮にて

を成していたそうです。ガイドの案内に耳を傾けながら、当時の様子を思い浮かべるのでありました。

今年の散策会では初めて、埼玉県を離れ隣の栃木県を訪れました。

五月十四日、快晴の下二十三名の参加により川越を出発、栃木県足利市に向かいました。

まず訪れたのは、日本最古の学校として知られる足利学校です。ここは儒学を学ぶために全国から多くの学徒が集まり、当時の文化都市とも言える足利の中心



足利学校遠景

その後足利学校からほど近い、「めん割烹なか川」へ場所を移し昼食をいただきました。この店はあの「相田みつを」ゆかりの店としても有名で、店内に飾られた作品の他にも、店舗看板や箸袋まで作品が使われています。そのお店で同氏も好物だったと言う、蕎麦を名物の甘露煮とともに美味しくいただきました。会員同士の懇親を深めました。

昼食後には、源姓足利氏二代目の足利義兼が一一九六年に建てたと伝えられている鑊阿寺を訪れた後、足利を後にして太田にある世良田東照宮に向かいました。

世良田が徳川氏の先祖の地ということから三代將軍家光が、日光東照宮を移築し家康公を祀ったという世良田東照宮について、徳川家の由来、東照宮の歴史などについて解説いただきました。

その中でも久能山、富士山、世良田、日光が一直線上にあるのは、久能山に神として再生された家康公が富士（不死）の山を越えて永遠の存在となり、遠祖の地を通り宇宙の中心軸線上に鎮まったことを意味するとい説があると聞き、個人的に大変興味をひかれました。(事務局)

ゴルフ同好会

優勝者 樫木権一

(高八回)



三十七名参加の川越カントリーでのコンペ

勝の最大の原因と想っています。お二人には心から感謝致します。
実は同クラブで第四回に優勝したときと、奇しくも同スコアでした。これも何か不思議な縁を感じています。今年八十歳になりましたが、ここからが再スタートと思い気力体力の続く限り参加したいと思っています。

最後になりますが、松本会長以下幹事の皆様には、いつも気遣い、心遣いを頂き改めて厚くお礼申し上げますと共に今後とも宜しくお願い致します。

事務局からのお願い

年会費二千円未納の方は、お早めに納入をお願いいたします。

発行人

会長 岩堀 弘明
事務局長 加島 篤人
事務局 川越市六軒町一三十一番地
題字 吉沢翠亭(義和)
印刷 (株)櫻井印刷所